

## 成功恐怖測定尺度の妥当性の検討

筑波大学大学院(博)心理学研究科 中山 勘次郎・安部 一子

筑波大学心理学系 高野 清純

A study in validity of the Fear of Success Scale.

Kanjiro Nakayama, Kazuko Abe and Seijun Takano (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305*)

Two studies were conducted to validate the Fear of Success Scale (FSS). In the study I, the factorial structure of FSS was analysed. The factors were very similar to those found in the previous studies. The correlations among FSS, the achievement related motives, the self-esteem, the sex-role identity, and loneliness showed that all of these traits except the sex-role were significantly related to the fear of success. In the study II, success-fearers (SF group) and non-success-fearers (NSF group) were given a success experience on the anagram task and their performance were compared. The results indicated that only males in the SF group were inclined to show lower performance than the NSF group. They were also significantly lower in their post-success performance. These results partially supported Cohen's conception of the fear of success.

Key words : fear of success, Fear of Success Scale, factor analysis, experimental validation, sex difference.

### 問 題

成功回避動機<sup>1</sup>の概念は Horner (1968) によって概念化され用いられた。Horner によれば成功回避動機とは、「競争場面での成功が負の結果を導くであろうという恐怖 (1969, p. 38)」である。成功回避動機については非常に多くの研究が行われてきたが、性差、他の心理学的概念との関係についての研究も多い。Horner (1968), Spence (1974), Good & Good (1973) や Zuckerman & Allison (1976) は性役割の社会化から成功回避を論じている。しかし、成功回避動機が男性にも認められつつある (Hoffman, 1974) との報告もあり、性役割から成功回避動機を説明しようとするには問題が多い。この点について、青柳 (1981) は成功回避動機の概念的再考を提案している。

一方、Pappo (1972) や Cohen (1974) によって提唱された成功恐怖の概念は、精神力動的心理学の流れから、成功回避動機に新たな見地を示した。Pappo, Cohen は成功恐怖の神経症的特性に関心を

寄せた。彼らは子どもの自立に対する親の神経症的不安が、子どもに取り入れられ、それが子どもの達成的行動を阻害してしまうと考える。したがって、成功恐怖は神経症的性格特性としてとらえられている。

Canavan-Gumpert et al. (1978) は、Pappo や Cohen の立場に立ち、成功恐怖の特色を他の類似の概念との関連から指摘し、次のようにまとめている。第1に、成功恐怖は男女ともに認められる。Horner (1968) によって提唱された成功回避動機は、女性の成功・達成と性役割との葛藤をその起源とし、女性に特有な動機とされているが、成功恐怖では、このような性差を認めていないのである。第2に、成功恐怖反応は成功への接近に伴って発現するが、成功恐怖の高い者は、成功そのものを否定しているわけではない。むしろ、彼らの達成への動機づけは比較的高い。第3に、成功恐怖の高い者には、全般にわたって不安の高い傾向があり、注意集中の障害も認められる。第4に、成功恐怖を示す者は、競争や評価に敏感である。第5に、彼らには自己の能力を過小評価する傾向があり、彼らの self-esteem は全般に低い。

また、従来、成功回避動機の測定には、投影法 (T.

1 ここでは、Horner の理論を成功回避動機 (motive to avoid success), Pappo らの理論を成功恐怖 (fear of success) として区別して用いる。

A.T.) が用いられてきたが、その信頼性の低さは以前から指摘されており (Zuckerman & Wheeler, 1975), Pappo や Cohen は成功恐怖に関する質問紙を作成した。Canavan-Gumpert et al. (1978) は、この質問紙を用いたこれまでの研究結果をまとめている。それによると、①成功恐怖は成功が近づくと現われる。すなわち、成功が近づいたと知覚されることで不安が生じ、これによって成功につながる達成行動が抑制される。②達成行動が不安生起によって抑制される (self-sabotage) と、不安は低減し、その後のパフォーマンスは回復する。③成功恐怖を示す者は成功が遠い時ほど成功を強く望む。④成功恐怖に男女差は認められない。

我々は、Cohen らの質問紙に基づいて、成功恐怖の強さを測定する尺度を作成した。その結果、かなり安定性の高い特性が測定されることが示された (岡島・桜井・勝倉, 1983)。しかし、この尺度が成功恐怖と呼び得る特性を測定し得るかどうかを明らかにする必要がある。そこで本研究では、成功恐怖測定尺度によって同定された成功恐怖が、Canavan-Gumpert et al. (1978) の指摘するような諸特性と実際に関連を持つかどうかを検討し、また実験的に設定された成功場面において、成功恐怖反応がどのように生起するかを分析することが意図された。

## 研 究 I

### 目 的

本研究では、問題の項に述べた成功恐怖と様々な特性 (達成動機、衰退不安、性役割観、評価への懸念、自己価値感等) との関連が、我々の作成した成功恐怖測定尺度に関しても認められるかどうかを明らかにすることが目的とされた。このため、成功恐怖測定尺度の内部構造の分析、および前述の各特性に関する尺度との関連の分析が行われた。

### 方 法

**被験者** 大学生男女 105 名 (男子 55 名・女子 50 名)。被験者は幼児・児童心理学の受講者であり、大半が 1 年生である。なお、成功恐怖測定尺度の因子分析に用いられた被験者は、尺度作成時の 178 名である。

**尺度** ①成功恐怖測定尺度 Pappo (1972) および Cohen (1974) をもとに、我々が独自に作成した尺度であり、詳細は岡島・桜井・勝倉 (1983) に述べられている。

②達成関連動機尺度 山内 (1980) の作成した尺

度より、達成動機に関する HS 尺度 I, II, IV, 失敗不安動機に関する FF 尺度 I, 成功不安動機に関する FS 尺度 I, II の 6 尺度 (各 5 項目) が用いられた。これらは、山内の命名によれば、順に「達成への手段的活動性」、「成功への願望」、「過度な自信と高慢さ」、「衰退不安」、「親和不安」、「成功回避」の各態度を示すものである。回答は、いずれも「はい・いいえ」の真偽法で行われ、採点には、山内 (1980) に従って各反応に対する重みづけ得点が用いられた。

③ self-esteem 尺度 遠藤・安藤・冷川・井上 (1974) の尺度から、彼らの因子分析をもとに、評価への懸念を示す 8 項目と自己の価値感を示す 3 項目が用いられた。回答は 5 段階評定法によって行われ、各特性の高い方から 5 ~ 1 点が与えられた。

④性役割観尺度 伊藤 (1978) の尺度より、Masculinity と Femininity に関する 10 項目ずつが用いられた。回答は、各個人にとっての重要度を 5 段階に分け、各段階に対してそれぞれ 4 項目の陳述を割り当てさせるという強制選択法によった。

⑤孤独感尺度 Russell, Peplau, & Ferguson (1978) の作成した UCLA Loneliness Scale を我々が日本語に翻訳したものが用いられた (20 項目)。回答は 5 段階法である。

**実施時期** 1982 年 2 月

**手続** 実施は授業時間を用いて、集団で行われた。なお、FS I, II および孤独感尺度は、すでに実施されていたものの結果が用いられた。

### 結果と考察

**男女差** 成功恐怖得点は、男子では平均 18.15 (SD = 7.96)、女子では平均 15.96 (SD = 7.11) であり、有意差は認められなかった ( $t = .99$ ,  $df = 103$ )。

このことは、成功恐怖が、Horner (1968) の理論による成功回避動機とは異なることを示唆するであろう。成功回避動機で仮定されているような男女差が認められないだけでなく、単に平均値を比較するなら、逆に男子の方に成功恐怖が高い傾向が見られるのである。

**成功恐怖測定尺度の内部構造** 成功恐怖測定尺度の 40 項目について、項目間相関を四分相関係数によって求め、因子分析 (主因子法→バリマックス回転) が行われた。この結果、Table 1 に示す 7 因子が抽出された。このうち第 I 因子は、「15 権力を主張しにくい」、「16 衝突を避けるために妥協しやすい」などが高い負荷量を持つことから、社会的場面での断行の欠如を表す因子と解釈される。第 II 因子には、尺度内の positive な記述がすべて高い負荷を示し

ており、能力感・自信の因子と考えられる。第III因子には高い負荷を持つ項目が少ないが、「32 自分の考えを、あらかじめ先生や友だちに確かめてもらわないとレポートが書けない」、「29 大切なしめ切りがせまってくると、いらいらして仕事に集中できなくなる」などの負荷量が比較的高い。これは、達成に対する否定的態度の因子と考えられよう。第IV因子は、「13 良いことがあると、次に悪いことがあるのではないかと気になる」、「35 一目置いている友だちから仕事をほめられると、いい気分にもなるが、不安にもなる」、「28 仕事がいまうきすぎるとこわくなる」など、いわゆる成功恐怖反応の因子であろう。第V因子には、「17 ある課題にとりかかろうとすると、他のことに注意がそれてしまう」、「23 はじめは仕事や勉強に熱中するが、すぐ飽きてしまう」などが高い負荷量を示しており、注意集中の障害を表すと考えられる。第VI因子は高い負荷量を示す項目が2つだけであるため、解釈不能である。第VII因子は、「25 子どものころ、先生にあてられると、正しい答を知っていても、いつも強い不安におそわれた」、「78 大切な仕事をなしとげられないことがある」などの負荷が高く、自己の能力の否定を表す因子と解釈できよう。

これらの因子は、おおむね Pappo (1972) や Cohen (1974) の見出した因子と一致するものである。しかし、Pappo, Cohen とともに報告している競争に対する関心の高さを示す因子は、ここでは見出されなかった。

**成功回避動機との関連** 成功恐怖と、達成動機理論の枠組における成功回避動機との関連を検討するため、FS I, II の各尺度と成功恐怖測定尺度との積率相関係数が求められた。それによれば、FS I とは中程度の相関が認められた ( $r = .448$ ) が、FS II とはほとんど関連が見られなかった ( $r = -.081$ )。

方法の項で述べたように、FS I は親和不安、FS II は成功回避の尺度である。親和不安との相関は、理論的にも首肯されるが、成功回避と相関が認められないというのは、一見矛盾しているように見える。しかし、FS II の項目を詳しく見ると、この尺度は、回避というよりはむしろ、競争の場面への無関心を表す尺度のように思われる。無意識的な不安の抑圧を仮定できないこともないであろうが、特にこれを回避と名づける必要はない。一方、成功恐怖測定尺度で測定されるのは神経症的な恐怖反応であり、これらの間の相関の低さも納得できるものであると言えよう。

**他の諸概念との関連** 成功恐怖測定尺度と達成関連動機尺度 (FS I, II を除く)、self-esteem 尺度、

Table 1 成功恐怖測定尺度の因子分析\*

項目	因 子							h <sup>2</sup>
	I	II	III	IV	V	VI	VII	
1		-37	38	53				61
2	62							55
3			40		38			42
4					64			64
5				40				50
6		58						63
7	40					49		58
8	36			40			39	56
9	42						60	62
10	39						50	61
11					35			44
12		65						72
13				75				65
14		53						66
15	71							74
16	66							61
17			42		53			64
18					46			49
19							50	58
20	60						42	68
21	40			45				56
22					64			66
23					58			57
24	43						48	59
25	43	-51					53	88
26					50			79
27		-39						44
28				71				65
29	40		47					51
30		75						67
31				49	36			46
32			59					60
33				36	54			52
34					48	-36	60	83
35				72				63
36		62	-45		-40			79
37		47						46
38		79						84
39	46				41			53
40					48		44	45
固有値	4.18	4.29	1.97	4.42	4.49	1.37	3.60	

30以上の負荷量を持つもののみを表示し、小数点は省略した。番号は項目番号に対応している。(項目内容は岡島他, 1983 参照)

Table 2 8特性の因子分析

特 性	因 子		h <sup>2</sup>
	I	II	
成 功 恐 怖	.87	-.14	.78
H S I	-.51	.16	.29
H S II	-.23	.40	.21
H S IV	-.75	-.13	.58
F F I	.41	-.15	.19
評 価 懸 念	.51	.66	.70
自 己 価 値 感	-.29	.75	.65
性 役 割 観	.09	.00	.01
孤 独 感	.65	.09	.43
固 有 値	2.58	1.25	

性役割観尺度、孤独感尺度との積率相関係数が求められた。その結果、性役割観尺度を除くすべての尺度との間に、有意な相関が得られた（ $r$ の絶対値は.287～.654）。特に相関が高いのは、HS IV（ $r = -.654$ ）、孤独感（ $r = .616$ ）、HS I（ $r = -.538$ ）の各尺度である。これらの関連を明確にするため、さらに、各尺度間の相関係数をもとに、主因子法による因子分析が行われ、バリマックス回転された。その結果、2つの因子が抽出された（Table 2）第I因子には成功恐怖測定尺度が最も高い負荷を持ち、そのほか self-esteem 尺度のうち評価懸念、HS I、HS IV、FF I、孤独感が高い負荷量を示していた。すなわち、成功恐怖を示す者は、評価される場面や重要な場面において強い不安を感じる。また、達成のために努力するという行動は少なく、対人関係においては孤独感を感じている、というような傾向が認められたのである。これらの結果は、全般的に、これまで多くの研究の中で報告されてきた事実とよく一致している。一方、性役割観との関連が見出されなかったことは、男女差の結果とともに、成功恐怖が Horner (1968) の概念化とは異なるものであることを示唆しているであろう。

全体を通して、以上の結果は、成功恐怖を示す者が、成功・失敗の事態、特にその社会的側面に対して過敏であることを推測させる。彼らにおいては、成功と親和的対人関係とは両立しないものと考えられている（FS I）。また実際、彼らは孤独である。しかもそれは、他人に対して全く無関心というものではなく、他者からの評価に対しては敏感に反応しているのである。このような対人関係における自信のなさが、成功・失敗という社会的評価を含む場面、あるいは競争場面に対して、彼らを過度に敏感にし

ているように思われる。これは、Cohen (1974) の見解と一致する。エディプス・コンプレックスという起源を仮定するかどうかはともかく、達成や成功が親和的対人関係を阻害するという懸念が、成功恐怖の中心的要因であることが示唆されるのである。

一方、理論的には彼らの達成動機は高いと考えられるが、本研究では、成功への願望（HSII）との相関は負の値を示した（ $r = -.287$ ）。しかしHSII尺度は、山内（1980）の分析でも親和不安（FS I）と相関を持たず、成功回避（FSII）と対極構造を成していた。前述のように、FSII 尺度で測定されるのは、単なる成功への無関心であると考えられ、その対極である HSII 尺度も、成功恐怖と関連するものではないのかも知れない。成功恐怖を示す者たちが、成功という事態に対してどのような態度を示すかは、指標を変えて、さらに検討する必要がある。

## 研 究 II

### 目 的

本研究では、成功恐怖測定尺度の結果と実際の課題遂行との関連を通して、尺度の行動予測性が検討される。具体的には、成功恐怖測定尺度の結果から、高成功恐怖群と低成功恐怖群を選び、成功場面が操作的に与えられた後、彼らの課題遂行にどのような差異がみられるか、さらに成功経験後の課題遂行に変化が見られるとするなら、彼らの不安や緊張との間に関係は見られるかの2点について、検討される。そこで、実験に先がけて、次のような予測がたてられた。

①高成功恐怖群は、低成功恐怖群に比べて成功経験に過敏であり、成功のフィードバックによって達成行動は抑制されるであろう（self-sabotage）。

②成功恐怖は、“成功”のフィードバックによって喚起され、したがって成功が近づくほど不安は高められるであろう。

③Horner (1968) の、成功回避動機が女性に出現し易いとする立場やその他の性差に関わる研究（Alper, 1973, 1974; Hoffman, 1974; Spence, 1974）とは異なり、Pappo や Cohen らの立場では、性差は仮定されない。したがって、成功恐怖による課題遂行の性差は認められないであろう。

### 方 法

被験者 大学生 195 名（男子 99 名・女子 96 名）に成功恐怖測定尺度を実施した（ $\bar{x} = 17.70$ ,  $SD = 7.88$ ）。平均  $\pm 1SD$  以上ずれのある者の中から、無

作為に高成功恐怖群 13 名(男子 6 名・女子 7 名,  $\bar{x} = 29.46$ ,  $SD = 3.23$ , 以下 SF 群), 低成功恐怖群 13 名(男子 4 名・女子 9 名,  $\bar{x} = 7.23$ ,  $SD = 1.96$ , 以下 NSF 群)が抽出され, 本実験に参加した。

**実験材料** ①アナグラム課題：ランダムに並んだ平仮名 4 文字から 3 文字を選んで普通名詞を作る課題。1 題 40 問からなり全 5 題である。②質問紙：テスト中の不安, 緊張, あせり, 注意集中の困難さの 4 項目について, それぞれ“全然ない—おおいにある”の 4 段階で評定される。また不安・緊張が感じられたのは何試行目かも合わせて尋ねられる。③筆記用具。④ストップウォッチ。

**手続き** 実験は個別に行われた。被験者は言語構成能力の実験ということで, 部屋に案内された。質問紙と共に綴じられたアナグラム課題が渡された後, 被験者に次のような教示が与えられた。「これから言語構成能力に関するテストを行います。課題は 4 文字の平仮名から 3 文字を選んで普通名詞を作るものです。課題は全部で 5 題あり, 1 題につき 1 分ずつ行います。」5 題の課題のうち, 1 題目は練習課題, 2 題目はベースライン測定課題, 3・4 題目は成功経験を与えるため, 時間はそれぞれ 75 秒, 90 秒に延長され, さらに課題が終わる毎に, 実験者から, 成績が非常に良く, 他者と比べても優れている, という成功に値する評価フィードバックが与えられた。5 題目はテスト課題で 90 秒であった。なお, 課題は 2 題ごとに休憩が入れられ, 最後の 5 題目を終えた後, 質問紙が実施された。

## 結 果

結果は, ①課題遂行(正答数), ②課題終了後の質問紙への回答, の 2 測度について分析された。

### ①課題遂行

課題遂行として, 5 課題のうち, 練習のための 1 題目を除き, 残りの 4 課題の正答数が算出された。

Table 3 は, 2 題目から 5 題目までの正答数について, 条件別・性別に各々の平均値と SD を示したものである。2 題目・3 題目では, 男子の NSF 群の方が SF 群よりも正答数が多かったのに対し, 女子では SF 群の方が NSF 群よりも正答数が多い。これを分散分析した結果, 交互作用に有意な傾向が見られた(それぞれ  $F_{(1,22)} = 3.73$ ;  $F_{(1,22)} = 3.48$ )。Fig. 1 には, 5 題目の各群の正答数が示されている。分散分析の結果から, 5 題目の正答数には, 交互作用に有意な差が示された( $F_{(1,22)} = 4.71$ ,  $p < .05$ ; Table 4)。さらに 2 題目・3 題目に有意な傾向が示されたので, 5 題目の遂行変化率(5 題目の正答数/4 題目の正答数)を算出し, これについて分散分析

Table 3 各試行における課題正答数

		単位/個				
		試行	2	3	4	5
SF	男	$\bar{X}$	10.00	12.25	18.25	15.75
		SD	2.55	1.09	2.38	2.38
	女	$\bar{X}$	11.50	15.50	18.88	19.50
		SD	3.35	4.39	2.62	1.80
NSF	男	$\bar{X}$	13.67	17.17	20.83	21.83
		SD	4.38	4.34	4.71	7.17
	女	$\bar{X}$	10.13	13.88	17.75	16.50
		SD	2.09	4.99	4.63	6.30

Table 4 5 題目の正答数についての分散分析表

		SS	df	MS	F
条 件		14.23	1	14.23	<1
性 別		3.75	1	3.75	<1
交互作用		123.07	1	123.07	4.71*
誤 差		574.55	22	26.12	
		715.60	25		* $p < .05$

Table 5 各群の不安・緊張

	S F		N S F	
	$\bar{X}$	(SD)	$\bar{X}$	(SD)
男	6.75	(1.48)	4.67	(3.09)
女	7.25	(2.73)	5.00	(2.78)

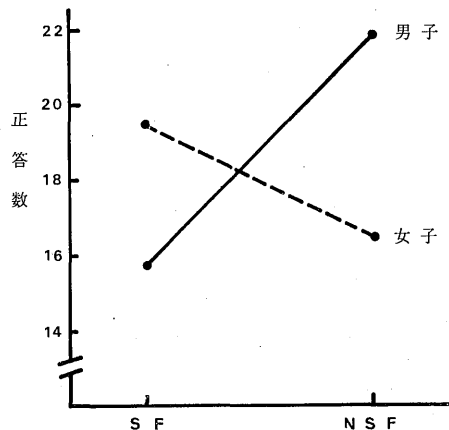


Fig. 1 第 5 試行における各実験群の正答数

Table 6 各試行で不安・緊張の発生した数

		単位/人			
試行		2	3	4	5
SF	男	3	0	2	2
	女	2	2	0	1
NSF	男	1	0	0	0
	女	3	2	2	5

を行ったところ、やはり5%水準で有意な交互作用が示された( $F_{(1,22)}=4.50$ )。そこでNewman-Keuls法により多重比較を行ったところ、男子のSF群とNSF群との間に5%水準で有意な差が示された。これより5題目の課題の正答数においては、SF群の男子はNSF群の男子に比べて有意に正答数が少なかったと言える。

#### ②課題終了後の質問紙への回答について

不安・緊張・あせり・注意集中の困難さについての質問で、「全然ない—おおいにある」の4段階評価での回答が、各々0点—3点の範囲で得点化された。4項目の合計点が個人ごとに集計され、その結果はTable 5に示されている。分散分析の結果、SF条件がNSF条件よりも得点が高い傾向が示された( $F_{(1,22)}=3.52$ ,  $p<.10$ )。Table 6には、各課題ごとに不安・緊張が感じられたと報告した人数が示されている。この結果では、条件、性差、交互作用とも有意な差は示されなかった。

### 考 察

本研究は、成功恐怖と課題遂行、不安・緊張との関係を明らかにすることを目的として実施された。主な結果は次のようである。①男子の、条件による差は有意であった。すなわち、SF群の男子は、NSF群の男子に比して有意に正答数が少ない。②不安・緊張はNSF群よりもSF群により強い傾向が示された。したがって予測①成功恐怖を示す者は成功経験に過敏であり、成功のフィードバックによって達成行動は妨害される、は部分的に支持され、②成功恐怖群は成功が近づくほど不安が高まる、は支持された。また予測③成功恐怖に性差は認められない、とする仮説については、交互作用が有意であったため、支持されず、従来の成功回避動機とはむしろ逆に、男性に、成功恐怖による課題遂行の抑制が示された。

先の成功恐怖の内部構造、および他の諸概念との関連の分析から得られた結果は、彼らが成功・失敗の評価に対して、対人関係を阻害するという懸念をもつがゆえに敏感であり、成功を否定する、という

特徴を明らかにした。本実験では、SF群の男性に、成功恐怖による達成の障害が示された。しかしこれが彼らの、対人関係を阻害するという懸念にもとづくものかどうかは本実験からは明らかではない。むしろ、男性に成功恐怖が示された場合には、彼らの“成功”への神経症的不安が喚起されたためと考えるのが、ここでは妥当と考えられる。なぜなら、女性よりも男性の方が、より達成的競争場面に直面する事は多く、またその場面における個人の責任が大きいことは当然予測されるからである。

また、本実験の結果では、SF群の男女に不安・緊張が高かったにもかかわらず、女子には成功恐怖による達成の障害は示されなかった。これは、先に述べた、競争場面での評価の重要性、結果への責任性も勿論、その一因として考えられるが、それよりもむしろ、ここで用いられた課題がアナグラムという、より女性向きの課題であったことが、成功回避よりもむしろ失敗回避動機を高めたとも推測される。これは不安・緊張の発生日数から推測されよう。Canavan-Gumpert et al. (1978)は成功恐怖を示す人たちがいつも成功を回避するとは限らず、むしろ成功を強く望んでいると述べている。成功恐怖には、失敗回避動機・達成動機・成功回避動機が含まれるとし、どの動機が強いかは、個人要因よりも状況要因に依存するとしているのである。

さらに、本実験では、実験者が男性であったことも、検討の余地があろう。Spence (1974)は、女性よりも男性の方が、同性の成功者に対して否定的であると述べている。実験者が男性であることは、男性の成功回避をよりひき起こし易い状況であったとも考えられよう。成功恐怖を示す者が常に成功を回避する訳ではなく、成功から遠ざかれば不安は低減され、再び成功へ向かって努力するとされていることから、継続的に成功場面を経験させること、同性・異性の成功者への意識を検討し、より競争的場面を設定することが今後必要であろう。

### 全体的考察

本研究では、Pappo (1972)やCohen (1974)の立場に基づいて作成された成功恐怖測定尺度の妥当性を検討するため、2つの研究が行われた。研究Iでは、測定尺度の内部構造の分析と、成功恐怖に関連する諸特性の分析が行われた。また研究IIでは、実験的に設定された成功場面において、成功恐怖反応の生起の様子が分析された。これらの研究を通じて、成功恐怖の概念が、Horner (1968)の成功回避動機とは性質を異にすることが示唆された。すなわち、成功恐怖の高さに性差は見られず、また性役割

観との関連も認められなかった。さらに、実験場面での成功恐怖反応は、Horner 理論とは逆に、男子にのみ出現したのである。

成功回避動機の枠組においても、性差のないことを報告した研究は多い。しかしこれには、女性解放思想が定着した結果、女性が伝統的性役割期待から解放されたのがその原因であり、女性特有の動機であることを否定するものではない、という説明が試みられている (Morgan & Mausner, 1973)。本研究の結果、特に研究 I についても、部分的にはこの説明が適用されるかも知れない。しかし、研究 II で男子にのみ成功恐怖反応が出現したことをも、同じように説明するのは難しいであろう。Horner 理論では、男性に成功回避が起こることを予測していないからである。これらの結果を効果的に説明するためには、Horner のように女性固有の動機としてではなく、Pappo らが提唱するように、男性にも同等に認められる動機として定義し、様々な状況変数によって、各場面での成功恐怖反応の生起に差異が生じると考える方が、より妥当であるように思われる。

成功回避動機に性差が見られないことのもう一つの説明は、男女においてその性質が異なるというものである (Hoffman, 1974)。すなわち、男子では成功の価値への懐疑であり、一方女子では、社会的拒絶への不安が中心である。しかし、我々の成功恐怖尺度は、成功への無関心を表すと思われる FS II 尺度とは関係がなく、親和不安尺度 (FS I) との相関が認められた。したがってこの尺度は、男性の特徴とされる価値観の違いによる成功回避を除外して測定していると考えられる。それにもかかわらず、男子の成功恐怖得点は女子とほぼ同様であり、実験場面でも男子に成功恐怖反応が観察されたのである。このことから、成功恐怖が男子にも認められることが示唆されるであろう。

最近青柳は、成功回避動機をより広くとらえ直すことを主張している (青柳・斉藤・金子, 1982)。それによれば、成功回避動機は次の 3 類型に分類される。第 1 は、達成動機が高く社会的拒絶への不安も強い場合であり、Horner 理論に近い (ただし性差は仮定しない)。第 2 は個人の価値観等によって達成動機が低いもので、不安は伴わない。第 3 は、能力欠如や無力感のために、成功は望むが成功に対して否定的になる場合である。Canavan-Gumpert et al. (1978) の報告する成功恐怖反応は、第 3 類型に最も近いように思われる。しかし彼らは、能力欠如感や無力感を成功恐怖反応の一種と考え、その背後には社会的拒絶への不安に基づく成功恐怖の存在を仮定している。本研究でも、評価懸念や孤独感など対

人関係への自信の欠如が、成功恐怖と強く結びついていることが示された。

青柳のモデルは、成功恐怖の本質が如何なるものであるかを探るうえで興味深い。社会的拒絶への不安に基づく成功恐怖と、能力欠如感による成功恐怖とは全く独立なのか、あるいは何らかの因果関係を持っているのかについては、さらに検討を続ける必要がある。とりわけ、実験場面において、単に課題遂行の差だけではなく、恐怖反応により直接的に焦点を当てた分析が必要であると思われる。

#### 要 約

本研究では、我々の作成した成功恐怖測定尺度の妥当性を検討するため、2つの研究が行われた。研究 I では、測定尺度の内部構造が因子分析によって分析され、また同時に、成功恐怖に関連する諸特性の分析が行われた。内部構造の分析では、①社会的場面での断行の欠如②能力感・自信③達成に対する否定的態度④成功恐怖反応⑤注意集中の障害⑥自己の能力の否定の各因子が解釈された。関連する特性の分析では、成功恐怖測定尺度の他、達成関連動機、self-esteem、性役割観、孤独感に関する尺度が同時に実施され、性役割観を除くすべての特性に、成功恐怖と有意な相関が認められた。特に、孤独感・評価懸念とは正の、また達成への手段的活動性・過度な自信と高慢さとは負の相関が高かった。これらのことから、成功恐怖と対人関係への自信の欠如との関連性が推測された。

研究 II では、高成功恐怖群 (SF群) と低成功恐怖群 (NSF群) とに対して、アナグラム課題が実施された。この時、試行時間を、被験者に知られないように延長していくことによって成功経験が与えられ、その後成功恐怖反応がどのように生起するかが比較された。その結果、男子においてのみ、NSF群と比較して、SF群の成功後のパフォーマンスが有意に低かった。また、男子の SF群のパフォーマンスは、全般的に NSF群より低いレベルにある傾向が認められた。

全体的に、成功恐怖は、Horner (1968) の述べるような女性特有の動機とは異なることが示された。このため、成功恐怖の本質が如何なるものであるかについて、新しい概念化の必要性が論じられた。

#### 文 献

- Alper, T. G. 1973 The relationship between role situation and achievement motivation in college women. *Journal of Personality*, 41, 9-31.  
Alper, T. G. 1974 Achievement motivation in

- college women : A now-you-see-it now-you-don't phenomenon. *American Psychologist*, **29**, 194-203.
- 青柳肇 1981 成功回避動機概念と問題点 日本心理学会第45回大会発表論文集, S 8.
- 青柳肇・斉藤浩子・金子智栄子 1982 成功回避動機に関する研究その5 — 概念の再検討 — 立川短大紀要, **15**, 47-53.
- Canavan-Gumpert, D., Garner, K., & Gumpert, P. 1978 *The success-fearing personality*. D. C. Heath.
- Cohen, N. E. 1974 Exploration in the fear of success. Unpublished doctoral dissertation, Columbia University.
- 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 1974 Self-esteem の研究 九州大学教育学部心理学部門紀要, **18**, 53-65.
- Good, L. R., & Good, K. C. 1973 An objective measure of the motive to avoid success. *Psychological Reports*, **33**, 1009-1010.
- Hoffman, L. W. 1974 Fear of success in males and females : 1965 and 1971. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 353-358.
- Horner, M. S. 1968 Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and non-competitive situations. Unpublished doctoral dissertation, University of Michigan.
- Horner, M. S. 1969 Fail : Bright women. *Psychology Today*, **2**, 36-38 ; 62.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, **26**, 1-10.
- Morgan, S. W., & Mausner, B. 1973 Behavioral and fantasied indicators of avoidance of success in men and women. *Journal of Personality*, **41**, 457-470.
- 岡島京子・桜井茂男・勝倉孝治 1983 成功恐怖概念の検討と測定尺度の作成 筑波大学心理学研究, **5**, 59-65.
- Pappo, M. 1972 Fear of success : A theoretical analysis and the construction and an validation of a measuring instrument. Unpublished doctoral dissertation, Columbia University.
- Russell, D. W., Peplau, L. A., & Ferguson, M. L. 1978 Developing a measure of loneliness. *Journal of Personality Assessment*, **42**, 290-294.
- Spence, J. T. 1974 The Thematic Apperception Test and attitudes toward achievement in women : A new look at the motive to avoid success and a new method of measurement. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 427-437.
- 山内弘継 1980 達成関連動機の測定尺度の分析 教育心理学研究 **28**, 275-283.
- Zuckerman, M., & Allison, S. N. 1976 An objective measure of fear of success : Construction and validation. *Journal of Personality Assessment*, **40**, 422-430.
- Zuckerman, M., & Wheeler, L. 1975 To dispel fantasies about the fantasy-based measure of fear of success. *Psychological Bulletin*, **82**, 932-946.